

プトレマイオス 1 世による都市アレクサンドリアの文化政策 — 〈図書館〉 とセラピス神をめぐる —

森 貴史*

The Cultural Policy of Ptolemy I in the Ancient City of Alexandria:
The Great Library of Alexandria and an Anthropomorphic God Called Serapis

Takashi MORI*

[Abstract]

After Alexander the Great died, his successor Ptolemy I, known as Ptolemy Soter, became the ruler of Egypt and set about making the Mediterranean city, Alexandria, not only the center of politics, but also the center of learning and culture. Soter also founded the Great Library of Alexandria (hereinafter referred to as the Great Library), and the Great Library became most famous for its collection of cultural and intellectual works in the ancient world. All the remains and sites, however, were under water and their historical details are unclear. "Mouseion" had also the Great Library, and many top scholars and intellectuals were brought together to contribute to the development of the academic achievements during the Hellenistic period. It is also said that the Great Library played an important role in the Greek translation of the Old Testament, "The Septuagint," the translation of the seventy interpreters. The policies on religion included the creation of Serapis, an ancient Egyptian religion. Serapis was actually a composite of the Egyptian god and the Greek god, and was created to form a spiritually integrated world of both the Egyptian and Greek people. As the Ptolemy Dynasty in Egypt began to fade, the Great Library as well as Serapis decreased in strength. Nevertheless, the culture of Alexandria, the ancient academic city, and the characteristics of the Great Library are still worth reviewing because their concept is a prototype of criteria for modern universities and libraries.

[要旨]

大王アレクサンドロスの死後、エジプトの統治者となったプトレマイオス 1 世（ソテル）は、地中海沿岸都市アレクサンドリアを、政治の中心地だけでなく、文化の中心地にもしようとした。かれが設立したアレクサンドリアの〈図書館〉は、古代世界でもっとも有名な知の殿堂となった。しかし現在、その遺跡はすべて水没して、いっさいが不明である。ムセイオンとこの〈図書館〉は、たくさんの優れた知識人が集うこととなり、ヘレニズム時代の学術の発展に貢献した。ギリシア語訳の聖書『セプトゥアギンタ』（70 人訳聖書）の成立にも大きな役割をはたしたとされる。また、宗教政策としては、セラピス神創造があげられる。これによって、ギリシア人とエジプト人のふたつの神を統合した神セラピスをつくることで、両市民の精神世界の統合をめざしたのである。やがて、プトレマイオス朝とともに、〈図書館〉やセラ

* 関西大学文学部 (Faculty of Letters, Kansai University, Japan)

ピソ信仰も衰退していったが、学術都市アレクサンドリアの文化や〈図書館〉は、現代の大学や図書館の原型となっているため、いまなお一顧するに足る対象であるだろう。

1 古代都市と図書館

紀元1世紀後半に活躍したギリシアの伝記作家プルタルコスによると、「天性学問、読書を好んでいた」¹というアレクサンドロスは詩人ホメロスを畏敬し、その英雄叙事詩『イリアス』をつねに携行していた。この『イリアス』は、若きアレクサンドロスの家庭教師であった古代ギリシア最大の哲学者アリストテレスが校訂したもので、ペルシア人から奪った美しい宝石箱に保管されていたことから、「宝石箱版」と呼ばれていた²。

このエピソードは、大王アレクサンドロスの教養と知性の高さを物語るものであるが、かれのお気に入りであったホメロスのもうひとつの代表的作品『オデュッセイア』は、その大王自身がのちに都市を建設することになったエジプト地中海沿岸地域の地誌を描いている。

「[···]、アイギュプトス [エジプト] の前面、波騒ぐ大海の中に、パロス [ファロス] と呼ばれる島があり、中のうつろな船が高らかに鳴る順風を背に受ければ、丸一日で行き着くほどの距離にある。この島には船の停泊に便な港があり、船乗りたちはここで清水を汲んだ後、均斉とれた船を海に出す」³

ホメロス『オデュッセイア』第4歌

のちに都市建設者の名をとって、アレクサンドリアと呼ばれることになる地が天然の良港として評判が高かったのを、ホメロスは知っていたのである (Fig. 1)。

現在のアレクサンドリアは、ヨーロッパの観光客がバカンスに訪れる風光明媚な地中海沿岸都市である (Fig. 2)。そして、良港としてのみならず、この町がヘレニズム世界で音に聞こえるようになるのは、アレクサンドロスの後継者ともいべきプトレマイオス1世 (Fig. 3) の治政によって、「世界の7不思議」といわれたファロス島の灯台⁴ (Fig. 4) と〈図書館〉が建設された結果であった⁵。

1 プルタルコス (井上一訳)、アレクサンドロス、プルタルコス (村川堅太郎ほか訳)、世界古典文学全集第23巻所収、筑摩書房、1965年、179-215頁、182頁。なお、本稿においては、神々の名称や地名などの古代エジプト語については、ギリシア語化した表記に統一した。

2 モスタファ・エル＝アバディ (松本慎二訳)、古代アレクサンドリア図書館、中央公論社、1991年、6頁参照。

3 ホメロス (松平千秋訳)、オデュッセイア (上)、岩波書店、1994年、101-102頁。

4 Egon Bauer: *Die Sieben Weltwunder*. München: Bassermann 2004, S. 130-141.

「灯台」を英語で pharos、ドイツ語で Pharus、フランス語で phare というが、その語源は、ファロス島という語に遡求される。野町啓、謎の古代都市アレクサンドリア、講談社、2000年、26頁参照。

5 アレクサンドリア〈図書館〉設立は、プトレマイオス1世の継嗣プトレマイオス2世によるものであるという異説がないわけではないが、近年ではプトレマイオス1世によるというのが通説のようだ。エル＝アバディ、1991年、65-70頁参照。

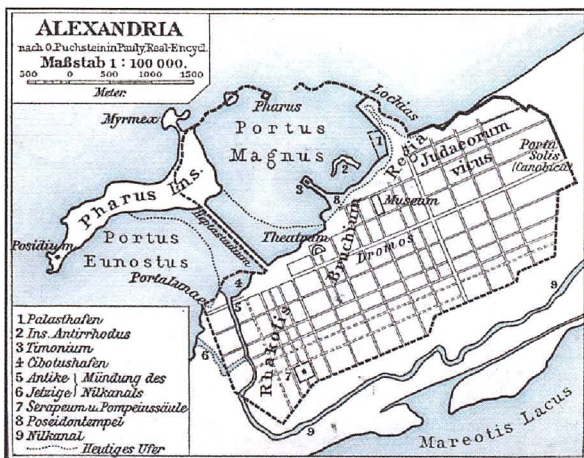


Fig. 1 古代アレクサンドリアの地図、ファロス島は左上方に位置している



Fig. 2 現在のアレクサンドリアの眺望（筆者撮影）



Fig. 3 プトレマイオス1世の胸像、パリ、ルーヴル美術館所蔵



Fig. 4 ファロス島の灯台がかつてあった場所に建つカイト・ベイ要塞（筆者撮影）

ところが、本稿のテーマのひとつであるアレクサンドリアの〈図書館〉に関する具体的な情報ということになると、現代においてこれほど有名であるにもかかわらず、いまだにほぼ五里霧中の状態である。当時の実態そのものについても、不明な点ばかりなのだ⁶。もちろん、古代の文献に伝承された記述がな

6 たとえば、以下のような記述が類書の代表的なものである。「さて、アレクサンドリア図書館そのものは一体どのようなものだったのか？／それが皆目分からないのである。プトレマイオス朝の歴史家もストラボンも一切言及していないし、考古学上の痕跡も見当たらない。驚くべきことだが、これよりも時代が古く規模も小さい図書館の遺跡は見つかっている。[...] /だが、プトレマイオス1世が造った古代の最大規模の図書館は、痕跡すら見つかっていない」。デレク・フラワー（柴田和雄訳）、知識の灯台 古代アレクサンドリア図書館の物語、柏書房、2003年、73-74頁。

いわけではないが、それぞれの記載内容に異同も多く、その真偽は永きにわたり、ヘレニズム研究者たちにゆだねられたままである。

いまのところ、われわれが〈図書館〉について、現地でおとずれることができるのは、かつてのラコティス村の古い砦に残る分館跡である。その遺跡の中心部には現在、「ポンペイウスの柱」⁷と呼ばれる巨柱が1本だけそびえている。そして、この遺跡こそは、プトレマイオス1世が創造したセラピス神の神殿「セラペウム」(Serapeum)の址^{あと}なのだった。

筆者自身も、本学の文化財保存修復研究拠点の支援によって2011年夏季休暇期間にアレクサンドリア滞在の機会を得て、〈図書館〉の分館跡とされている遺跡へも足を踏みいれ、そのかなり広大な面積を踏査した。「ポンペイウスの柱」(Fig. 5)だけは、その大きさと形状をよく残していたが、小型スフィンクス像などのごくわずかな彫像のほかには、廃墟というよりも残滓という印象のほうが強かった。

今回参照した文献に、『アレクサンドリア図書館の謎』⁸という邦題の訳書があるが、文字どおり、残された「謎」は非常に多い。過去の名声とは完全に断絶した、この〈図書館〉をめぐる問題は多面的である。その存亡の歴史、蔵書のゆくえ、分館の存在、セラペウム、ムセイオンなどの他施設との関係などが、古代史や考証的文献学の立場で論じられてきた。最近では、「制度」、「知」、「政治(ポリス国家)」というメディア論の視点からの分析もおこなわれている⁹。

とはいえ、門外漢である筆者が論じようとするのは、そうした〈図書館〉の「謎」そのものではない。本稿があつかうのは、〈図書館〉ではなく、いわばこれに付随するアレクサンドリアの都市文化の雰囲気や要素というべきものに焦点をしばって、文化史的に論及することにしたい。

本稿の目的はそれゆえ、都市アレクサンドリアとその〈図書館〉の問題を中心に、かの地を最初に統治したプトレマイオス朝の始祖プトレマイオス1世(ソテル)の思考と発想をたどることである。そのさい、かれが創造したとされるセラピス神の考察も、その輪郭を知る一助となるはずだ。ここにも、ヘレニズム時代の文化や精神世界についてのかれの考え方がよく発現していると考えられるからである。

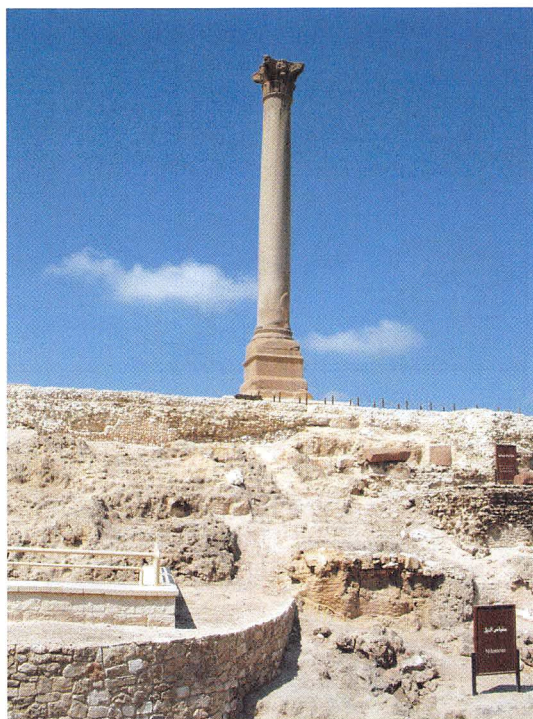


Fig. 5 ポンペイウスの柱(筆者撮影)

7 ちなみに、この「ポンペイウス(ポンペイ)の柱」という名称は、誤って伝承されたもので、正確には、ディオクレティアヌス帝(在位284-305)がセラペウムの近くで起きた叛乱を鎮圧したことを祝って建立したものである。フラワー、2003年、188-190頁。

8 ルチャーノ・カンフォラ(竹山博英訳)、アレクサンドリア図書館の謎 古代の知の宝庫を読み解く、工作舎、1999年。

9 イアン・F・マクニーリー、ライザ・ウルヴァートン(富永星訳、長谷川一解説)、知はいかにして「再発明」されたか アレクサンドリア図書館からインターネットまで、日経BP社、2010年、19-22頁参照。

とりわけ、本稿が論及したいのは、アレクサンドリアという当時は新設であった都市の性質や、その〈図書館〉建設の意義と目的である。それによって、この王がヘレニズム世界をいかに理解し、いかに統治しようとしていたかが明らかになるとと思われる。その結果、プトレマイオス1世が志向していた都市とその文化政策のありかたは、複数文化の共存という視点では、21世紀にあっても着目すべき要因を有していたのを知らるだろう。

2 ヘレニズム世界とアレクサンドリア

この都市はそもそも、その名のとおり、アレクサンドロス（前356-323）がエジプトからペルシアを駆逐して、地中海沿岸のカノピック河口、ファロス島、ラコティス村を中心に新しく建設したことに由来する。紀元前323年6月10日、アレクサンドロスがバビロニアで熱病から33歳で頓死したあと、その広大な領土は配下の将軍たちに分配されて、エジプトはプトレマイオスの所領となった¹⁰。古代アレクサンドリアの〈図書館〉を設立したプトレマイオス1世（前376/7-283/2）だが、マケドニア人のかれの来歴はその思想を知るうえで非常に重要である。すなわち、かれの父ラゴスはマケドニアの低級な守備隊隊長ではあったが、資産家で明敏だった。また、母親はアレクサンドロスの父フィリッポスのまたいとこに相当する高貴な家柄であったともいう¹¹。

いずれにしても、若きプトレマイオスはアレクサンドロス王子の相談役にして親友であった。それゆえ、王子の家庭教師アリストテレスの教えも受けており、アレクサンドロスが世界征服事業を開始すると、側近として従軍したのである¹²。

こうした生活環境は、プトレマイオス1世に多大な影響をあたえており、アレクサンドロス自身が卓越した教養人であったという事実も勘案すると¹³、将来の自領土の首都となる都市を建設したアレクサンドロスによるものの多大さは、言をまたないはずである。

アレクサンドロスとプトレマイオスの密接な関係と、前者の后者への多大なる影響をおよぼしたのは、

10 フラワー、2003年、23頁、エル＝アバディ、1991年、15-20頁参照。

しかしながら、プトレマイオスは、すぐに王を名乗ったわけではない。紀元前306年にエジプト王を宣言するまでは、「総督」を意味するサトラップという身分のままであった。エル＝アバディ、1991年、22頁参照。

ジャスティン・ポラード、ハワード・リード（藤井留美訳）、アレクサンドリアの興亡、主婦の友社、2009年、47頁参照。

11 フラワー、2003年、23頁参照。べつの説では、プトレマイオスの父ラゴスは、マケドニア人という以外、その一族について詳細が不明ともされている。ポラード、リード、2009年、46-47頁参照。

12 ポラード、リード、2009年、47頁参照。

13 もともとマケドニア王家じたいがギリシアの著名な知識人たちを多く庇護してきたという家風にも依拠する部分が多いが、プルタルコスによれば、アレクサンドロスの読んだものとして、ヘロドトス、クセノフォン、フィリストゥスといった歴史家の著作、テレステス、フィロクセヌスのディオニュソス頌歌、アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスなどの悲劇などがあげられる。プルタルコス、1965年、182頁参照。また、アテナイオスの逸話によると、ペルシア遠征時の酒宴で、エウリピデスの悲劇『アンドロメダ』の1場面を暗唱してみせたという。エル＝アバディ、1991年、5頁参照。手嶋兼輔、ギリシア文明とはなにか、講談社、2010年、90-91頁参照。

明白である。「アレクサンドロスの遺したものを正確に理解できていたのは、子どものころからの親友であり、軍の総大將的な立場にあるプトレマイオスだけだった。彼は最初のころからアレクサンドロスと行動をともにし、アモン神殿で信託が下ったときにも付き添っていた [シーワ・オアシスにあった神殿で、アレクサンドロスは当時、信仰が厚かったアモン神に世界征服の信託を受けたという逸話がある]。アレクサンドロスが死んだときもバビロニアにい」¹⁴ たのだ。

すなわち、「子どものころからアレクサンドロスと一緒にいたプトレマイオスは、彼の仕事ぶりを間近に観察し、彼の成功に学び、彼の失敗からさらに多くを学んだ」¹⁵ ということばに集約される。プトレマイオスはまさしく、アレクサンドロスの後継者であった。

ところで、アレクサンドロスやプトレマイオス1世の時代と文化をあらわすのは、〈ヘレニズム〉という語である。語源的には「ヘブライ語法混じりのギリシア語の」という意味であったが、アレクサンドロス大王の治世からローマのアウグストゥス治世までの古代史の時期を、ドイツ人歴史学者ヨーハン・グスターフ・ドロイゼン(1808-84)が〈ヘレニズム〉と呼んだことに由来する。この約300年間の時代、文化、文明をそう呼称して、それまでのアルカイックや古典期のギリシアとその文明とを区分するものである¹⁶。

マケドニア王フィリッポス2世がギリシアを統一したのち、息子のアレクサンドロスがインドまで東征をおこなった結果、ギリシア文化が均質に広がった。大王は遠征途上で都市を建設し、ギリシア人とその地の住民を混住させる政策をとった。共通の言語を使用し、相手の宗教を受容し、陶器、彫刻、硬貨、建築などの文化は広範囲な類似性を有するにいたったのである¹⁷。

〈ヘレニズム〉という語は、現在のヨーロッパ語にも、その影響の大きさを残しており、そこからこの時代と文化の本質を看取することができる。たとえば、『ドゥーデン・ドイツ語辞典』(第3版、1999年)をひもとくと、「ヘレニズム化する」(hellenisieren)というドイツ語は「ギリシアの模範によって造形(具体化)すること」(nach griechischem Vorbild gestalten)¹⁸と記載されている。また、この語の日本語訳は、独和大辞典第2版(小学館、1998年)では「ギリシア化する、ギリシア風にする」¹⁹という意味である。

つまり、ヘレニズム文化の本質とは、ギリシア文化を普及させること、〈ギリシア化〉なのである。この〈ギリシア化〉によって、アレクサンドロスの広大な帝国は、ギリシア的な「単一文化的連続体」として統合されたといえるだろう²⁰。

そして、アレクサンドロスの東征から学んだプトレマイオス1世は、マケドニアやギリシア至上主義を提唱せずに、〈征服〉ではなく、〈統治〉に重きをおいた。政治体制はマケドニア王朝の移入ではなく、

14 ポラード、リード、2009年、41頁参照。

15 ポラード、リード、2009年、46頁。

16 フランソワ・シャムー(桐村泰次訳)、ヘレニズム文明、論創社、2011年、5頁参照。

17 ジョン・キャンプ、エリザベス・フィッシャー(吉岡晶子訳)、図説古代ギリシア、東京書籍、2004年、276、284頁参照。

18 *Duden Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden*. 3., völlig neu bearbeitete und erweiterte Aufl. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag 1999, Bd. 4., S. 1730.

19 国松孝二(編)、独和大辞典第2版、小学館、1998年、1061頁。

20 F・W・ウォールバンク(小河陽訳)、ヘレニズム世界、教文館、1988年、85頁参照。

エジプト国家体制の継承であって、その結果、エジプト文明とギリシア文化との融合を成立させることに成功した²¹。この文化と文明が融合した中心地こそが、都市アレクサンドリアだったのである。

3 〈図書館〉建造

たしかに、古代アレクサンドリアの〈図書館〉は同時代にあまねく知られていたが、それ以前にこのような施設がまったくなかったわけではない。紀元前7世紀には、アッシリア王アッシュールバニパルがチグリス河畔のニネヴェに古代最大の図書館のひとつを建設しているし、プラトン、エウリピデス、トゥキディデス、ヘロドトスのような学者たちは、大規模な個人図書館を所有しており、なかでもアリストテレスの個人図書館は最大の名声を誇っていた²²。

そうした時代状況のなかで、プトレマイオス1世がアレクサンドリアでの〈図書館〉建設を企図したのは、この新設都市を「商業・行政」の首都だけでなく、「文化の中心地」にもしようとしたからである²³。

そのために、かれが登用したのが、ファレロンのデメトリオスである。アテナイでの政治の経験があったデメトリオスは、政治家であったばかりでなく、哲学者、文筆家にして、アリストテレスの学説の熱狂的な支持者であったので、かれが新規に設立したムセイオンは、プラトンのアカデメイアとアリストテレスのリュケイオンというふたつの哲学教育機関に強く影響を受けていた²⁴。

学芸の女神ミューズたちを祀る神殿であるムセイオンは、科学と文学との完全な融和がみられる哲学教育機関であるが、いわば学術研究センターでもあって、さまざまな分野の優れた学者を集めた。とりわけ、著名な人物は「数学の父」こと、アレクサンドリア生まれといわれるエウクレイデス（ユークリッド）である。そして、このムセイオンに設置されたのが、かの〈図書館〉なのである²⁵。

ムセイオンやセラペウムといった神殿に〈図書館〉がそなわっているということに対して、われわれはいくらかの違和感をおぼえるが、宗教志向が強いエジプトにおいては自明であった。なぜなら、神官が子どもたちに文字を教えたり、幾何学や算術を重視する社会であって、天文学の膨大な記録を管理する文化であった。そのような文化にあって、神殿とは、国家の重要な事件すべてに関する「神聖記録」（ヒエライ・アナグラフィ）を神官たちが保管する場所であって、つまりエジプトでは、神殿こそは学問の中心だったのである²⁶。

〈図書館〉は当初、港をみおろす王宮の敷地内のムセイオンのすぐそばに建てられていたが、半世紀後には、蔵書量が所蔵能力を超えてしまったために、プトレマイオス3世エウエルゲテスによって、姉

21 手嶋兼輔、2010年、161-166頁参照。

22 スチュアート・A・P・マレー（日暮雅通訳）、図説 図書館の歴史、原書房、2011年、16-18、24-25頁参照。

23 Vgl. Cécile Orru: Ein Raub der Flammen? Die königliche Bibliothek von Alexandria. In: Wolfram Hoepfner (Hrsg.): *Antike Bibliotheken*. Mainz: Phillip von Zabern 2002, S. 31-38, hier S. 31.

24 Vgl. Ebd.

25 エル＝アバディ、1991年、71-74頁参照。

26 エル＝アバディ、1991年、59-60頁参照。

妹図書館としての分館がセラペウム内に開設されたという²⁷。

この古代図書館の名声は、古代、中世を問わず、類をみないものであるが、現代では、以下のごとく評されている。「総合図書館への抱負を抱き、学者のコミュニティを目指してスタートしたアレクサンドリアの最初の図書館は、現在の総合大学の原型になったのである」²⁸。

とりわけ、本稿で〈図書館〉をめぐるエピソードで重要なのは、『セプトゥアギンタ』（70人訳聖書）と呼ばれるギリシア語訳聖書である。

創建された国際都市アレクサンドリアは即座に、幾多の国籍や信仰をもつ人びとが暮らすようになったが、ユダヤ人社会もまた、急速に発展した共同体のひとつであった。しかし、ユダヤ移民も世代が進むと、この都市はギリシア語が共通語であったために、ヘブライ語によるユダヤ教聖典の『聖書』が読めないユダヤ人が増えてきたのである。それゆえ、ギリシア語訳の『モーセ五書』が作成されるにいたったのだ²⁹。

この翻訳に関する伝承は多くあるが、以下のものがよく知られている。ユダヤの大祭司の求めで、デメトリオスが翻訳家を集めることを、プトレマイオス1世に具申した。その結果、イスラエルの12部族から各6人からなる72人の翻訳家が招集されて、70日で翻訳が完成したことから、70を意味する『セプトゥアギンタ』と名づけられたという³⁰。

この逸話をそのまま真実とするのは、やはり無理があるようだ。現在の通説によると、じっさいには、アレクサンドリア以外の地でこの訳業がなされたとされているが、アレクサンドリアの文化が根本的役割を果たしたのは、明らかなようである³¹。

いずれにしても、プトレマイオス朝の首都では、さまざまな問題を胚胎しながらも、ユダヤ人の共同体との共生もおこなわれていた。いくらかの異説があるとしても、ヘブライ語からギリシア語への聖書翻訳がなされて、この訳業の達成に、ムセイオンや〈図書館〉によって地中海沿岸で広く知られた学術都市アレクサンドリアが貢献したことは、その面目躍如たるものであるといえよう。

27 エル＝アバディ、1991年、81-82頁参照。書籍の収集方法は、悪名高いエピソードも伝わっている。黄金を担保に、アテナイから貴重な巻物をアレクサンドリア図書館が借り出しながら、アテナイに返却したのは、写本のほうだったという。マレー、原書房、2011年、27-28頁参照。

28 マシュー・バトルズ（白須英子訳）、図書館の興亡 古代アレクサンドリアから現代まで、草思社、2004年、41頁。

29 フラワー、2003年、103-104頁参照。

30 フラワー、2003年、104頁参照。

31 フラワー、2003年、104頁参照。このようなヘブライ語からギリシア語への翻訳を題材としている小説が、曾野綾子『アレキサンドリア』（1997年）である。物語は、現代の日本人の老若男女がさまざまに主人公として登場する短編パートと、ヘレニズム時代のアレクサンドリア在住のユダヤ人が、現在は旧約聖書の外典とされている祖父が書いた「ベン・シラの知恵」をギリシア語に翻訳していく連作パートで構成されている。曾野綾子、アレクサンドリア、文藝春秋、2005年、305-306頁参照。

4 セラピス神創造

プトレマイオス1世の思想をなぞるうえで、もうひとつ忘れてはならないのがセラピス信仰である。ムセイオンと〈図書館〉建設とならんで、かれの施政の双璧をなすものであるが、そのまえに、かれがアレクサンドロスの遺体をどこに安置したかを知っておく必要がある。

バビロニアで死んだアレクサンドロスの遺体は、マケドニアへ向けて出発した葬列とともにあったが、プトレマイオスの命令によって、遺体はシナイ半島を横断して、エジプトの古都メンフィスへたどりつく。この旧都はアレクサンドロスがかつて戴冠した都市である。古くからエジプトの宗教と王権の中心地であったメンフィスに遺体を安置することは、かれがその都市を築いた歴代ファラオの正式な後継者であるという宣言を意味していた。くわえて、あの大王がその魂の安住の地にエジプトを選んだという事実は、エジプト人たちの心情に深く訴えかけるものだった³²。このように、エジプト人たちの精神世界に対して配慮することで、プトレマイオスはその統治の足場を固めたのである。

そして、かれがつぎに手がけたのは、セラピス神 (Fig. 6) である。セラピス (Serapis) については、いくらかの解説を要する。古代エジプトの神々は、その長大な歴史過程において多種多様な分離と習合をくりかえしてきたが、セラピス神も例にもれない。セラピス神は、オシリス神と聖牛アピス (Fig. 7) が融合した「オシリス・アピス」神 (Fig. 8) に由来している。この神は古王国時代の都メンフィスでの特異な信仰形体をとったオシリス神で、ネクタネボの神殿でみられるものであった。それを、プトレマイオス1世がアレクサンドリアへ移植し、大部分をギリシア化したのである³³。



Fig. 6 セラピス神、ヴァチカン所蔵

32 ポラード、リード、2009年、52-55頁参照。

33 Vgl. Serapis: In: *Lexikon der Ägyptologie*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz 1984, Bd. 5, S. 870-874, hier S. 870.

聖牛アピスの信仰についても、説明が必要である。古代エジプトでは、動物崇拜が一般的であって、ほかの人格神とともに厚く信仰されていた。アピスは、神聖動物の牡牛にして、プタハ神やオシリス神の分身とみなされて、大事に世話されたり、祭礼でまつられたのである。メンフィスのオシリス・アピスは、この聖牛信仰とオシリス信仰が融合したものと考えられている。ヴェロニカ・イオンズ (酒井傳六訳)、エジプト神話、青土社、1988年、241-249頁参照。



Fig. 7 セラペウム遺跡内部に安置された聖牛アピス像
(筆者撮影)



Fig. 8 オシリス神の背面に聖牛アピスの顔がついているオシリス・アピス神像

オシリス神そのものはすでに、アレクサンドリア建設以前のその地にあったラコティス村の丘でも信仰されており³⁴、エジプトの神々のなかでも、母神イシスとならぶ最高の男性神でもあった。プルタルコス『イシスとオシリス』やタキトウスの『同時代史』の記述では、プトレマイオス1世が夢の神託で小アジアのシノペのプルートル像（タキトウスによれば、ユピテル像）をアレクサンドリアへと移送し、ラコティスの新神殿に設置させたといわれている³⁵。

セラピス神の神性の起源は、オシリス神であるが³⁶、オシリス神そのものがファルス信仰、冥府の王プルートル、豊穰神といったそれまでのギリシアとエジプトの神々の多くの神性を統合したような男性神である³⁷。エジプト人たちがこのオシリス神をギリシアの豊穰神ディオニュソスと同定しているのを、ヘロドトスは伝えている³⁸。

マケドニア人のプトレマイオス1世がわざわざ新しい信仰対象をつくりだした意図は明白だ。当時、アレクサンドリアに移住してきたギリシア人と、在来住民のエジプト人の両者に共通の神をあたえるためである。結果として、セラピス神はアレクサンドリアの守護神となったのだった³⁹。

34 E・M・フォースター（中野康司訳）、アレクサンドリア、筑摩書房、2010年、26-27、43頁参照。

35 タキトウス（國原吉之助訳）、同時代史、筑摩書房、2012年、374-377頁、プルタルコス、イシスとオシリス、プルタルコス（飯尾都人訳）、ディオドロス神代地誌、龍溪書舎、1999年、571-636頁所収、592頁参照。

36 Vgl. *Lexikon der Ägyptologie*. Bd. 5, S. 871.

37 ユルギス・バルトルシャイティス（有田忠郎訳）、イシス探求、国書刊行会、1992年、28-30頁参照。

38 ヘロドトス（松平千秋訳）、歴史（上）、岩波書店、2007年、216頁参照。

39 Vgl. *Lexikon der Ägyptologie*. Bd. 5, S. 871.

このあたりの事情はとりわけ、われわれ日本人にはわかりにくいと思われる。それこそがプトレマイオス1世によるセラピス神創造の背景となっているのであるが、キリスト教普及以前のヘレニズム文化圏の精神生活について、第1次世界大戦時にアレクサンドリアに駐在していたE・M・フォースターがうまく解説している。

「この宗教は正しく、あの宗教は間違っている、と考えるのは本質的にキリスト教的な考え方であり、アレクサンドリアで一緒に生活していたエジプト人とギリシャ人は、けっしてそうは考えなかった。それぞれが自分の国の言葉を話すように、それぞれが自分の国の神々を崇拝したが、お隣の国の神々は存在しないのだなどはけっして考えず、むしろ、自分たちの神々が別の名を借りているのではないかと考えた」⁴⁰。

キリスト教がローマ帝国の国教となる以前のヘレニズム世界において、現代のわれわれが思っているよりも、人びとの精神世界のありかたはもっと多様性を有し、ほかの宗教に対しても寛容であったために、併せ併存していたといえるだろう。

5 世界の融合をめざして

その息子プトレマイオス2世を共同統治者に任命した紀元前285年から3年後、プトレマイオス1世は48歳で死去する⁴¹。都市アレクサンドリアとプトレマイオス朝繁栄の基礎をなしたプトレマイオス1世は一般的には、エジプト王として善政をおこなったとされている⁴²。もちろん、ムセイオンと〈図書館〉創立、セラピス神創造といった事跡にしても、かれがアレクサンドロスから継承した都市と支配権の確立をめざしてなされたことはまちがいない。

しかしながら、その政策においては、エジプトの既存の政治や宗教の機構を刷新し、新しい行政と合体させることに成功したのも、事実であろう。テーベ、メンフィス、タニスといったエジプトの王朝時代の行政と宗教の中心地に、アレクサンドリアがとってかわったことは、地中海世界に向けてエジプト再編がなされた証左でもある⁴³。

とはいえ、プトレマイオス朝の人気は長続きしなかった。紀元前208年から186年と、紀元前88年から86年には、テーベ地域で反乱がおこり、支配力は衰退していったのであって、最後の女王クレオパトラ7世がローマによるエジプト征服の契機となったことは世界史的によく知られている⁴⁴。

アレクサンドリアの〈図書館〉の終焉に関しては、その都市とエジプトの歴史の転変をかんがみるためには重要である。かの〈図書館〉がいつ焼失したのかについては諸説あるが、おもにつぎの3説であ

40 フォースター、2010年、42頁。

41 ポラード、リード、2009年、136-137頁参照。

42 山花京子、古代エジプトの歴史 新王朝時代からプトレマイオス朝時代まで、慶應義塾大学出版会、2010年、162頁参照。

43 プトレマイオス：イアン・ショー、ポール・ニコルソン（内田杉彦訳）、大英博物館古代エジプト百科事典、原書房、1997年、470-471頁、ここでは471頁参照。

44 ショー、ニコルソン、1997年、471頁参照。

る。紀元前 48 年のアレクサンドリア戦役、391 年のセラペウム破壊、642 年のアラブによるエジプト征服である⁴⁵。

アレクサンドリア戦役とは、プトレマイオス朝の内戦時に、クレオパトラに肩入れしたカエサルが彼女の弟プトレマイオス 13 世を敵として戦ったファロス島沿岸での海戦をいう。このさいに、カエサルは海上や入港中の敵艦隊を焼き払うのだが、これが町全体に延焼し、〈図書館〉もおなじく類焼したとされている⁴⁶。

第 2 説は、焼失した〈図書館〉の姉妹図書館がセラペウムにあったという事実にもとづく。すでにキリスト教がローマ国教になっていた 391 年、テオドシウス帝がアレクサンドリア市内の異教神殿破壊を許可すると、司教テオフィロス⁴⁷とキリスト教徒たちがセラピス像を破壊、セラペウムに侵入し、破壊と略奪のかぎりを尽くし、その神域内の〈図書館〉と蔵書とともに最期を迎えたとしている⁴⁸。

そして、642 年にアラブの将軍アムルがエジプトを征服し、アレクサンドリアを占領したさいのエピソードが最後の説である。アムルがカリフのオマールに〈図書館〉の蔵書の処遇を照会すると、焼却との返答を受けたために、浴場の燃料として給したが、およそ半年分に相当したという⁴⁹。

本稿にとって、アレクサンドリアの〈図書館〉の終焉時期がことさら興味深いのは、その 3 期がそれぞれ、新勢力の台頭によるものであることだ。最初の説のアレクサンドリア戦役は、カエサルに代表されるローマ帝国の台頭がめざましい時期であり、第 2 の説のセラペウム破壊では、ローマ帝国の国教となったキリスト教の勢力増大がその背景をなしている。第 3 番目におけるアラブのエジプト征服は、さらなる世界史的転機をみせている。アラブ人のエジプトへの流入は、かつてのギリシア人入植と同様に、アレクサンドリアの人口全体の比率のみならず、キリスト教徒とイスラム教徒との信徒数の割合も大きくぬりかえただろう。都市アレクサンドリア建設、ムセイオンと〈図書館〉設置、セラピス神創造をなしたプトレマイオス 1 世が意図していた時代が明らかに変転していったのがわかるのである。

セラピス神についても言及すると、その信仰は、女神イシスとともに、地中海沿岸のみならず、ヨーロッパ各地にまで広がった。イベリア半島では、ポンペイのイシス神殿と類似したセラピス神殿や、その信仰を証明する遺品が多く発掘されたほか、ヨークとシルチェスターのセラピス神殿、ロンドン近郊のイシス神殿なども発見されている⁵⁰。

これほど広範に普及したオシリス神信仰の終焉をもたらしたのは、391 年にテオドシウス帝が出した異教禁止令と、これを根拠に同年発生したアレクサンドリアとカノプソスのセラピス神殿（セラペウ

45 エル＝アバディ、1991 年、144 頁参照。

46 エル＝アバディ、1991 年、144-149 頁参照。

47 テオフィロスのあとを継いだその甥キュリロスも、アレクサンドリアの総主教になったが、かれが扇動したとされるプラトン主義女性哲学者ヒュパティアの殺害（415 年）も、この時代のキリスト教徒による蛮行のひとつとして認識されている。『キリスト教人名事典』編集委員会（編）、キュリロス（アレクサンドリアの）、キリスト教人名事典、日本基督教団出版局、1986 年、432 頁参照。

48 バトルズ、2004 年、33-34 頁参照。

49 エル＝アバディ、1991 年、168-173 頁参照。しかし、この説の根拠となる記述は、13 世紀に突如あらわれたものであるために、フィクションとする見解が有力である。ポラード、リード、2009 年、458-459 頁参照。

50 バルトルシャイティス、1992 年、10 頁参照。

ム)破壊である。世界の驚異と感嘆されてきたセラピス神像は、兵士の斧で叩き割られた⁵¹。前述のように、アレクサンドリアのセラペウムには、〈図書館〉の分館があったとされており、キリスト教徒による破壊は、セラピス信仰のみならず、〈図書館〉もまた破壊したのである。

プトレマイオス1世の新支配地エジプトでの文化政策が多分に政治的であったことは、既述のとおりであるが、それでも、そのムセイオンと〈図書館〉設立は「知による統治」として、セラピス神創造もまた、エジプト人とギリシア人の共存共生をはかる「精神世界による統治」として代表されるものだ。そして、これこそが300年にわたる〈ヘレニズム〉という時代、文化、文明をなした動因のひとつであるだろう。プトレマイオス1世がおこなった文化政策の発想についてはそれゆえ、現代においても、一考を要するものがあると思われる(現代が古代世界ほどに単純ではないのは明白であり、実現性に難があるのも承知のうえで)。

たとえば、現在の大学が、知的活動の全領域をカバーしていると主張したとしても、けっして過去に存在した制度すべての頂点ではないかもしれず、現在のシステムは、ありうべき最良のものではない可能性もあるとすれば⁵²、ときには、古代アレクサンドリアの〈図書館〉というその知の源流を遡行することも、じゅうぶん to 一定以上の意義をもつのではないだろうか。

最後に、ヘレニズム文化がわれわれにいまもって影響を伝えている事例を紹介したい。英語の「図書館」を意味する library という語は、ラテン語の「本」を意味する liber に由来するが、その一方で、「パピルスの巻物」という意のギリシア語は biblion で、「巻物を保管する容器」を bibliothēke と呼んでいた⁵³。そして、この語から派生したドイツ語 Bibliothek やフランス語 bibliothèque は、「図書館」を意味している。すなわち、英語以外のヨーロッパ言語の「図書館」という語のなかには、〈「パピルスの巻物」を保管するもの〉というギリシア語源のことばが伝統的に息づいているのである。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成20年度～平成24年度)」によって行われた。

51 ポラード、リード、2009年、422-424頁参照。

52 マクニーリー、ウルヴァートン、2010年、16頁参照。

53 マレー、原書房、2011年、20頁参照。